

# 熊野隆治の社会教育活動と松風会所蔵「観風文庫」

竹原 幸太

東北公益文科大学総合研究論集第34号 抜刷

2018年7月30日発行

## 熊野隆治の社会教育活動と松風会所蔵「観風文庫」

竹原 幸太

### 1. 課題設定

多くの先行研究が指摘しているように、所謂15年戦争時期の教育・社会事業の再編は「人的資源」を培養すべく、「皇国民錬成」を理念として軍事教育体制が強化された（吉田1971、寺崎・戦時下教育研究会1987）。

特殊教育史としても位置づけられる児童・少年保護史研究においても、戦時下には大正期以降、激しく議論が交わされてきた内務省が管轄する感化法（後の少年教護法）下の児童保護事業と司法省が管轄する少年法・矯正院法下の少年保護事業の原理の相違への関心も後退し、戦時厚生事業への再編過程で両者は同質化していったことが指摘されてきた（土井1972：224-225）。

もっとも、近年の児童・少年保護史研究では、戦時体制に基づく事業再編に疑問を呈し、初代武蔵野学院長（国立感化院・少年教護院）の菊池俊諦や初代多摩少年院長の太田秀穂等のように、非転向・抵抗を示す者が存在したことも知られている（竹原2015a、2016）。

この点と関連して、かつて日本思想史研究の一主題として取り組まれた「転向の共同研究」において、鶴見俊輔は「非転向の地点に自分をおいて転向を批判しようとするのではなく、むしろそれぞれの時代的条件の中に実現可能であった非転向の条件を知ることをとおして、両者をともに批判する」視点の必要性を指摘した（鶴見1959：7-9）。

筆者はこれまで、子どもの権利論を軸とする児童保護論を唱えた菊池俊諦を基点として武蔵野学院の感化教育・少年教護史を検討し、戦争が激化する1941（昭和16）年3月に菊池退職後、二代目院長に就任した熊野隆治についても取り上げてきた（竹原2015b）。

しかし、鶴見の指摘を踏まえた場合、菊池や戦後教護界をリードした石原登（初代きぬ川学院長）との対比で熊野に言及していた限界があり、また、児童・少年保護史研究においても熊野は「みかへの塔」をシンボル化し、少年

教護法制定運動の一翼を担った戦前期の業績に関心が集中していた（大阪府立修徳学院・財団法人修友会2000、二井・石原・山崎2008）。したがって、熊野についても菊池や石原らと同様に戦後の足跡までを射程としてその業績を辿ることが児童・少年保護史研究上の課題であった。

そこで、本稿では、第一に熊野自身が晩年に著した自伝『米寿記念 観風苦難の生涯』松風寮内観風会（1969）及び同書を基に書かれた「熊野隆治小伝」（福原2009）を手がかりに戦前期の感化院・少年教護院長としての業績を概観する。

第二に、これまでの児童・少年保護史研究において言及されることがなかった、戦後の熊野の山口県内での社会教育活動について検討する。

第三に、先行研究ではその存在すら知られていなかった山口県教育会館内松風会に熊野が寄贈した「観風文庫」について検討する。

以上を通じて、学校教育、児童・少年保護教育、社会教育に携わった教育家としての熊野に一貫する特色を明らかにする。

## 2. 感化院・少年教護院長としての熊野隆治の功績

### 1) 小学校長から感化院長へ

熊野隆治（くまのたかはる、1882～1975）は、1882（明治15）年山口県大津郡俵山村黒川で出生し、幼名は尊治、後に隆治と改めた。俵山村立田中尋常小学校、深川村立深川尋常高等小学校高等科卒業後、1897（明治30）年4月に俵山村「中和塾」、翌年4月には山口町「黒城私塾」に入り、漢学、国語、数学、英学、書学等を学んだ。

1899（明治32）年に山口県立師範学校本科第一部へ入学し、19歳で冷水摩擦を始めて後に感化院の教育でも導入し、生涯の日課とした（熊野1969：35、84）。1903（明治36）年3月に同校卒業と同時に4月から深川尋常高等小学校教諭となり、翌年には23歳の若さで俵山尋常高等小学校訓導兼校長となった。

1911（明治44）年4月からは山口県立師範学校教諭となり、1916（大正5）年9月に同校校長として赴任する菊池俊諦（1919年初代武蔵野学院長へ転任）と同僚であった。後年、熊野自身も「（菊池－筆者注）先生が山口師範学校長時代暫く其部下の教諭として仕えて居た」と回想している（熊野1936：493-

494)。

1919（大正8）年吉敷郡視学、1921（大正10）年山口県視学、1923（大正12）年山口県社会課長を経て、1925（大正14）年に44歳で二代目山口県立育成学校長（感化院）として感化教育界へ転じ、1927（昭和2）年2月に三代目大阪府立修徳館長（1934年修徳学院へ改称）に赴任した。

修徳館時代は「人間道德の基礎は報恩」であり、「報恩の基礎であり出発点は母である」との認識を示し、1929（昭和4）年6月に深く母を思わせる「母の日の行事」を導入し、母子の鐘の音である「みかへのり塔」を1933（昭和8）年に建設してシンボル化した（熊野1969：100）。

また、1928（昭和3）年から機関誌『徳化運動』を発行しつつ、1931（昭和6）年11月に感化法改正運動（少年教護法制定運動）を支えるべく日本感化教育会関西支部の後援の下、『少年教護時報』を創刊し、翌年には熊野の前の二代目修徳館長であった武田慎治郎（武田塾長）、池田千年（土山学園長）、田中藤左衛門（京都陽学校長）と「少年教護法私案」をまとめ、同運動の中軸を担った（二井・石原・山崎2008：17-21）。

熊野自身も『徳化運動』等での発表論考を『少年徳化体験集』という小冊子（第一輯 至難教育三十カ条、第二輯 教育体系略説、第三輯 楠公六百年と行の教育、第四輯 よいお母さん十カ条、第五輯 婦人に知らず少年保護、第六輯 母の日、第七輯 黒髪を切った母の祈り三版、第八輯 吾が子のための修養訓、第九輯 修徳学院の生活と教育を語る、第十輯 嗚呼苦難の学院十五事業三版、第十一輯 よき母の心得、第十二輯 不良化せる子供は如何に導くべきか、第十三輯 如何にして子供の意志を強くするか）でまとめている。とりわけ、1939（昭和14）年に同体験集の第十四輯として豊島與志雄と著した『みかへのり塔』はベストセラーとなり、1941（昭和16）年には映画化された（熊野1969：113-114）。

さらに、1931（昭和6）年4月3日に開催した感化法発布30周年記念の物故日本感化教育恩人祭において、感化教育のパイオニアである池上雪枝の功績が不明だった点に鑑み、以降、熊野をリーダーとして修徳学院関係者で池上に関する調査を重ね、1939（昭和14）年に『池上雪枝女史小伝』（修徳学院）を著し、翌年3月には柳政一（大阪府少年教護委員、日本少年教護協会理事）、波

頭忠雄（修徳学院教諭）と共著で『少年感化の母 池上雪枝』（大阪朝日新聞社会事業団）を著した。

## 2) 国立少年教護院武蔵野学院長への転任

名実とも少年教護界の中心的人物となった熊野は1940（昭和15）年11月に厚生省児童課長伊藤清より電報で呼び出され、「突如今回菊池院長が、皇紀二千六百年を機として勇退申出あり、よってその後任を引き受けられたし」と言われ、熊野は再三断ったものの社会局長熊谷憲一からも押され、翌年3月に二代目武蔵野学院長として赴任することとなった（熊野1969：121）。

着任3ヵ月後、熊野は二代目院長として、「当学院教育経営十二綱領」（昭和16年5月案）、「当学院教授十五綱領」（昭和16年5月案）、「日本少年教護事業革新目標」（昭和16年8月21日）、「学院の特色發揮」（昭和16年8月21日）、「学院欠点芟除」（昭和16年8月21日）、「教職員に与ふる活動五則」（昭和16年8月23日）等を示し、6月には「母の日の行事」を導入し、8月には同院後援会浴風会を徳風会へと改組し、時局に即して院内の大改革を進めた。

しかし、こうした院内改革に対して、石原登や赤羽芳雄らは抵抗したため、職員間の対立が浮上したが（竹原2015b：21）、熊野自身は教育の主体は母との理念を曲げることなく、1943（昭和18）年2月には『少年徳化体験集』の母親論に関するテーマ（よき母の心得、如何にして子供の意志を強くするか、よいお母さん十カ条等）を再編して著書『母の反省』（堀書店）を著した。

同年10月の全国少年教護院長会議では少年教護物故者慰霊祭を挙行し、修徳学院時代に柳政一らとまとめた感化教育の先人の業績を加筆し、翌年10月には『日本少年教護事業物故十二恩人小伝』（武蔵野学院内財団法人徳風会）を著し、1945（昭和20）年8月に終戦を迎えた（熊野1944：5-6、1969：14）。

## 3. 社会教育家としての熊野隆治と松風寮の創設

### 1) 山口地方教育関係者懇話会での郷土教育史研究

終戦の翌月、熊野は少年教護法の改正案から少年保導法案を作成するも、1946（昭和21）年1月に65歳で武蔵野学院を退職することとなり<sup>1)</sup>、3月に故

<sup>1)</sup> 武蔵野学院の退職について熊野は多くを語っていないが、熊野が公職追放となり、三代目院長に青木延春が就任したとされる（宮澤1987：70、73）。

郷山口県俵山へ帰郷した。

先行研究では熊野の晩年については触れられていないが、武蔵野学院退職後、熊野は約30年間、社会教育家として山口県内の教育に携わっていた。

帰郷当初、熊野は「郷里俵山から出来るだけ優秀な青年を出そう」と社会教育にかける思いであったが、『みかへりの塔』の作者として広く知られた熊野の帰郷を知り、県内全域から多数の講演依頼を受けたため、間もなく山口に居を移し、帰郷後約1年を過ぎた1947（昭和22）年3月までに役場、寺院、学校等で136回の講演を担った。

翌年1月には新日本建設同盟機関誌の原稿依頼を受けつつ、山口県児童福祉審議会委員、社会教育委員を委嘱され、警察学校や山口刑務所等でも講演を担い、1950（昭和25）年6月には感化法50周年を記念して厚生大臣より感謝状を受けている。この時期、母校山口大学（旧山口師範学校）をはじめ、山口県内の教育関係者と山口地方教育関係者懇話会を持ち、少年教護院長時代に先人の功績を辿ったのと同様に、県内の教育に尽くした先人の足跡を辿り、これを教育関係者の前で紹介した（熊野1955a, 1955b, 1957a, 1957b）。

そして、県内の先人が伊藤利助（博文）、高杉晋作らを輩出した松下村塾運営者の吉田松陰の功績に学んでいることも踏まえ、その精神を現代の教育に継承すべく、1956（昭和31）年に山口県教育会内に「吉田松陰先生殉難100年記念事業準備委員会（松陰先生百年祭記念事業推進会）」を組織し、二木謙吾（山口県議会議長・山口県教育会会長）を中心として1959（昭和34）年に松陰没後100周年の記念行事を実施した（熊野1969：138-148）。

なお、同時期の1958（昭和33）年は修徳学院50周年の時期でもあったが、熊野自身は祝電を送ったのみであり（同前：149）、この時期、熊野が吉田松陰の記念事業にいかん力を入れていたかが窺える。

## 2) 吉田松陰の精神を学ぶ松風寮の建設

松陰没後100周年記念の中核事業の一つに松風寮の創設が位置づけられていた。同寮の建設趣旨は、寮生活を通じて吉田松陰の精神を学ぶことであり、山口県教育会が運営主体となり、山口大学の男子学生を入寮者の対象とした（松風会2011：1-4）。熊野は松陰100年記念事業推進委員会委員として松風寮の寄付金集め等の中心的役割を担い、寮の運営にも携わることとなった（二木

1969)。

こうした県内での社会教育活動の実績が称えられ、1965（昭和40）年に「山口地方教育関係者新年懇話会」で顕彰を受け、翌年10月には、松風寮に書籍116冊を寄贈し、寮創設の恩人として熊野と二木の写真が講堂に飾られた（松風会HP）。

この時、熊野は既に80代半ばを過ぎ、講演等も少なくなっており、人生の総括としてか、1968（昭和43）年6月の修徳学院60周年みかへりの塔改築祝賀会、翌年4月の武蔵野学院50周年式典に列席していたようである（熊野1969：158-159）<sup>2</sup>。そして、1969（昭和44）年8月に自らの生涯をまとめた自伝『米寿記念 勤風苦難の生涯』を松風寮内観風会より出版し、約4年後の1975（昭和50）年1月、92歳で他界し、10月に松風寮への寄贈図書が整理されて「観風文庫」とされた（松風会HP）。

なお、山口県教育会内で吉田松陰没後100周年を記念して推進されてきた事業は1974（昭和44）年に財団法人松風会として独立し（2012年公益財団法人へ改組）、松風寮の運営も同会の傘下となったが、道路建設計画に伴い、1981（昭和56）年に総計460名余の学生を育てた同寮は閉鎖され、翌年3月に山口県教育会館内に松風会の事務所が移された（松風会2011：1-3）。

#### 4. 山口県教育会館内松風会所蔵「観風文庫」の内容

##### 1) 松風会所蔵の松風寮関係資料

現在、山口県教育会館内松風会では吉田松陰の調査・研究を進めつつ、松陰に関する研修会・講演会の開催や書籍発行、関連資料の展示等を行っている。

1981（昭和56）年に松風寮が閉鎖したことに伴い、その関係資料は山口県教育会館内の松風会に移され、講堂に飾ってあった熊野隆治と二木謙吾の写真が事務局に、松風寮と書かれた書は展示室にそれぞれ飾られている（写真1、2）。

熊野が寄贈し、後に整理された「観風文庫」については、現在所蔵されているものは、『増補日本政記』、『孟子』等の教科書類と大日本文庫シリーズの計

<sup>2</sup> 自伝には「修徳学院六十周年 みかへりの塔改築祝賀会 知事佐藤義詮氏臨席」、「国立武蔵野学院五十周年式典 臨席 第一代院長菊池俊諦氏来臨九十五才」と記述があり、熊野が出席したとは断言できないが、「大阪府立修徳学院五十周年記念会祝電」のように、祝電のみの場合は臨席者の記述がないため、出席と判断した。



写真1 松風会事務室 熊野隆治・二木謙吾写真

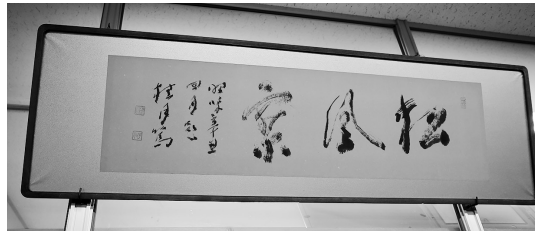


写真2 松風会展示室 松風寮書（松林桂月書）

86冊（表1,2）であり、その他、松陰と松下村塾の写真5枚が松風会事務室の書棚に所蔵されている<sup>3)</sup>。

表1 「観風文庫」文献目録（教科書類、38冊）

著者・書名	発行年・発行箇所等	備考
『増補日本政記一〜八』(8冊)	1890年頃(一〜七については詳細不明)	・八巻巻末に明治33年3月3版出刻と記載
『頭書再刻 詩経集註一〜三』(3冊)	年代不明、大阪書林	・扉に全八冊と記載
黒田子謹編『頭書訓読 庭訓往来精注鈔 全』(1冊)	年代不明、浪速書舗	
大槻磐翁『刑修近古史談 二、四』(2冊)	1893、1894年	・奥付に文部省検定済漢文科教科書と記載 ・二の奥付には明治26年、四の奥付には明治27年の記載
五十川左武郎『古文孝経』(1冊)	1882年、此村欽英堂	
『大学章句』(1冊)	年代不明	
北村四良兵衛『孟子一〜四』(4冊、寛政4年)	1794年?	・奥付に寛政6年発兌と記載
後藤點『論語』(3冊)	年代不明	

<sup>3)</sup> 熊野が当初寄贈した116冊の図書がどのような基準で整理されたかは定かではない。現在、松風会の書棚でも「観風文庫」という形では所蔵されておらず、水津栄三事務局長が同会理事会で確認の上、割り出して頂いたのが上記86点であり、30冊が除籍されたと判断できる（2018年3月22日於山口県教育会館内松風会事務室、水津氏へのヒアリングより）。



『中庸章句』(1冊)	年代不明	・裏表紙に明治14年買得と書き込み
頼又二郎・行徳玉江・行徳敬二郎『集註 纂評謝選拾遺 一～五』(5冊)	1883年、出版人行徳敬二郎	・奥付に明治16年出版と記載
近藤元粹註釋『箋註十八史略校本』(7冊)	1880年、出版人中川勘助	
徳富猪一郎『頼山陽』(1冊)	1926年、民友社	
富士川游『新釈 實語教』中山文化研究所(1冊)	1935年、中山文化研究所	

表2 「観風文庫」文献目録(大日本文庫、48冊)

常盤大定校訂『佛教編 聖徳太子集』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
師蠻校訂『佛教編 本朝高僧伝 上・下』(2冊)	1935年、春陽堂書店	
長井真琴校訂『佛教編 弘法大師集』(1冊)	1936年、春陽堂書店	
常盤大定校訂『佛教編 日蓮上人集』(1冊)	1937年、春陽堂書店	
常盤大定校訂『佛教編 白隠禅師集』(1冊)	1938年、大日本文庫刊行会	
長井真琴校訂『佛教編 法然上人集』(1冊)	1939年、大日本文庫刊行会	
小柳司気太校訂『儒教編 陽明學派 上・中・下』(3冊)	1935～36年、春陽堂書店	・上・中巻は1935年発行 ・下巻は1936年発行
小柳司気太校訂『儒教編 先哲叢談』(1冊)	1936年、春陽堂書店	
小柳司気太校訂『儒教編 二宮學派・折衷學派』(1冊)	1937年、春陽堂書店	
平泉澄校訂『國史編 神皇正統記 愚管抄』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
平泉澄校訂『國史編 大鏡・増鏡』(1冊)	1936年、春陽堂書店	
平泉澄校訂『國史編 日本外史 上・下』(2冊)	1936年、春陽堂書店	
平泉澄校訂『國史編 大日本史一』(1冊)	1937年、春陽堂書店	
平泉澄校訂『國史編 続日本書紀 上』(1冊)	1938年、大日本文庫刊行会	
平泉澄校訂『國史編 日本書紀』(1冊)	1943年、大日本文庫刊行会	
高木武校訂『文学編 平家物語』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
吉澤義則校訂『文学編 物語文學集』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
高野辰之校訂『文学編 近松浄瑠璃傑作集上・下』(2冊)	1935年、春陽堂書店	
和田萬吉・野々村戒三校訂『文学編 狂言選』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
和田萬吉校訂『文学編 謡曲選』(1冊)	1936年、春陽堂書店	
佐々木信綱校訂『文学編 萬葉集 上・下』(2冊)	1935～36年、春陽堂書店	・上巻1935年、下巻1936年発行
久松潜一校訂『文学編 榮花物語上・下』(2冊)	1936年、春陽堂書店	
上田萬年・島津久基校訂『文学編 南總里見八犬伝1～3』(3冊)	1937～1942年、春陽堂書店、大日本文庫刊行会	・1巻は1937年発行、出版元は春陽堂書店 ・2巻は1939年発行、出版元は大日本文庫刊行会 ・3巻は1942年発行、出版元は大日本文庫刊行会(背表紙欠落、同年5月18日の発送案内書挟込)

高津久基校訂『文学編 今昔物語上・中』(2冊)	1937～1942年、春陽堂書店、大日本文庫刊行会	・上巻は1937年発行、出版元は春陽堂書店 ・中巻は1942年発行、出版元は大日本文庫刊行会(背表紙欠落)
吉澤義則校訂『文学編 隨筆文學集』(1冊)	1938年、大日本文庫刊行会	
中村孝也校訂『文学編 水戸學派其他』(1冊)	1939年、大日本文庫刊行会	
井上哲次郎・上田萬年監修・井野辺茂雄校訂『勤王編 勤王志士遺文集 1～3』(3冊)	1937～41年、大日本文庫刊行会	・1巻1940年発行、出版元は大日本文庫刊行会(背表紙欠落) ・2巻は1941年発行、出版元は大日本文庫刊行会(背表紙スレ) ・3巻は1937年発行、出版元は春陽堂書店
田中義能校訂『神道編 復古神道 上・中』(2冊)	1935～36年、春陽堂書店	・上巻1935年、下巻1936年発行
佐伯有義校訂『神道編 垂加神道 上・中』(2冊)	1935～37年、春陽堂書店	・上巻1935年、下巻1937年発行
佐伯有義校訂『神道編 吉川神道』(1冊)	1939年、大日本文庫刊行会	
中村孝也校訂『國体編 大日本史贊藪 保建大記 中興鑑言』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
滝精一校訂『芸道編 畫道集』(1冊)	1938年、大日本文庫刊行会	
植木直一郎校訂『地誌編 風土記集』(1冊)	1935年、春陽堂書店	
井上哲次郎校訂『武士道編 武士道集 上』(1冊)	1934年、春陽堂書店	

※大日本文庫は1937(昭和12)年まで春陽堂書店発行、翌年以降は大日本文庫刊行会発行。

表1の教科書類については、熊野の略歴とその発行時期、「大津郡俵山村 熊野隆治」という記名等を照合すると、熊野が学生時代に使用していた教科書だと判断できる(写真3,4,5)。



写真3 「観風文庫」教科書類



写真4 「観風文庫」『増補日本政記 一～八』

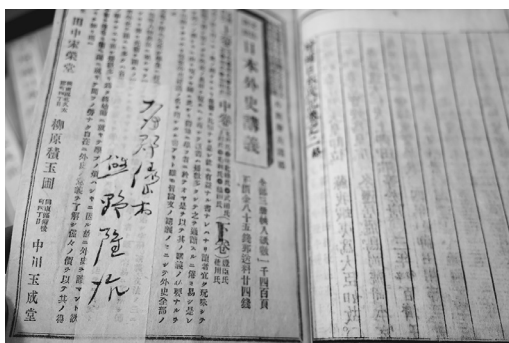


写真5 「観風文庫」『増補日本政記』熊野隆治記名

大日本文庫については年代的に熊野が少年教護院長時代に購入したものであり、一部の納品書には「埼玉県 熊野隆治殿 昭和17年5月18日」との記載があり（写真6,7）、武蔵野学院長時代に購入したことも確認できる。

## 2) 「観風文庫」所蔵資料から推察する松風寮の教育内容

「観風文庫」所蔵の資料群は、日本史、国文学、日本文化等に関わる資料が多くを占めており、松風寮でこれがいかに活用されていたかは定かではない。

ただし、先行研究でも熊野が山口県師範学校へ入学する前、「中和塾」、「黒城私塾」という私塾（寺子屋）に入塾している点が注目されていたように（福原2009：8）、熊野は吉田松陰の精神を学ぶ松風寮をかつての寺子屋のように見て、その学習教材として上記資料を寄贈したようにも推察される。



写真6 「観風文庫」大日本文庫



写真7 大日本文庫購入時期

ちなみに、寺子屋の歴史教育で活用された教科書では、日本史では『日本外史』、『国史略』、『御成敗式目』、『日本政記』、『皇朝略』、外国史では『十八史略』、『春秋左氏伝』、『史記』、『資治通鑑』、『通鑑綱目』の順に多く（吉田1967：53-55）、また松下村塾では『孟子』や『講孟余話』等が使用されており（松風会2017：215）、「観風文庫」所蔵資料とも重なる部分が多いことが確認できる。

さらに、松風寮の学生組織尚友（1961年発足、同年より1981年まで寮誌『尚友』を発行、通巻17号）の名前の由来は『孟子』万章上8章によるものと考えられている（松風会2011：4）。

もともと、「観風文庫」所蔵資料から寺子屋と松風寮の教育内容の重なりを

推察しているに過ぎず、永池克明氏（元九州大学、久留米大学教授）等、同寮出身者の証言から（松風会2011：4-5）、熊野がどの程度、寮運営や教育内容に関与していたのかを明らかにすることは今後の調査課題である。

## 結び—児童・少年保護から社会教育での寮舎教育へ

以上、熊野隆治の生涯を通史で見た場合、熊野は学生時代の原風景とも言える寺子屋式の教育形態を感化院・少年教護院の寮舎教育でも活かし、「みかへの塔」に象徴される道徳教育を展開した。そして、戦後は児童・少年保護から社会教育の場に移り、青年を対象として松風寮において吉田松陰の教育精神を基軸に寮舎教育を実践していった。

ここには日本の伝統精神を大切にする教育家熊野の一貫した姿勢が浮かび上がるが、他方で戦時中は児童・少年保護を挙げて軍事教育が進められ、熊野もその波に否応なく飲み込まれることとなった。

戦時下の最中、熊野は武蔵野学院での教育改革に臨んだが、児童・少年保護事業全体としては科学的な視点からの処遇が後退し、少年院では「短期錬成」でその教育内容が変更され、真冬の早朝にも禊の儀式を実施し、体調を崩す少年が生じたことは周知の事実である（竹原2017）。

二代目武蔵野学院長として大日本文庫等を手にとり、冷水摩擦を日課として日本の伝統精神にも学んだ熊野自身は、当時の児童・少年保護事業の再編を「意図せざる方向」へ進んで行ったと見たのか、それとも「進むべき道」として見ていたのか等を検討することは今後の課題である。

## 参考文献

大阪府立修徳学院・財団法人修友会編（2000）『みかへの塔 それから—父の鐘・母子の鐘 巣立った子らの心の癒し』三学出版

熊野隆治（1936）「景仰せる菊池先生」『菊池俊諦氏還暦記念文集』菊池俊諦氏還暦祝賀会事務所

熊野隆治（1944）『日本少年教護事業物故十二恩人小伝』武蔵野学院内財団法人徳風会

熊野隆治（1955a）『山口県の産んだ二大画伯の本懇話会に対する高志に就て』

- 私家版小冊子（第三十五回山口地方教育関係者新年懇話会）
- 熊野隆治（1955b）『山口学都に於ける私学創設の功績者岡村・大谷両先生を懐う』私家版小冊子（第三十五回山口地方教育関係者新年懇話会）
- 熊野隆治（1957a）『教育関係者懇話会叢書第五 山口学都に於ける教育功績者佐野、作間、荒川三先生を讃える（第三十七回山口地方教育関係者新年懇話会）』山口地方教育関係者新年懇話会
- 熊野隆治（1957b）『教育関係者懇話会叢書第六 三画伯の本懇話会に寄せられた芳情に就て（第三十七回山口地方教育関係者新年懇話会）』山口地方教育関係者新年懇話会
- 熊野隆治（1969）『米寿記念 観風苦難の生涯』松風寮内観風会
- 松風会（2011）『松風会会報 松門』41号
- 松風会（2017）『松陰読本・手引き書－吉田松陰の生涯と業績』同会
- 竹原幸太（2015a）『菊池俊諦の児童保護・児童福祉思想に関する研究－戦前・戦中・戦後の軌跡と現代児童福祉法制への継承』早稲田大学出版部
- 竹原幸太（2015b）「武蔵野学院職員の感化教育・少年教護実践史研究－初代院長菊池俊諦を基点として」『教育学研究』日本教育学会、82巻3号
- 竹原幸太（2016）「大正少年法施行期における少年保護実務家の少年保護思想に関する研究－1922年から1930年代半ばまでを対象として」社会事業史学会第44回大会配布資料（2016年5月14日於石巻専修大学）
- 竹原幸太（2017）「戦中期少年保護実践の変質に関する研究－少年院を中心に」日本社会福祉学会第65回秋季大会配布資料（2017年10月22日於首都大学東京）
- 鶴見俊輔（1959）「転向の共同研究について」思想の科学研究会編『共同研究 転向 上巻』平凡社
- 寺崎昌男・戦時下教育研究会（1987）『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践』東京大学出版会
- 土井洋一（1972）「青少年非行－教護院問題の一考察」小川利夫・永井憲一・平原春好編『教育と福祉の権利』勁草書房
- 二井仁美・石原剛志・山崎由可里（2008）「近代日本感化教育史における大阪府立修徳学院所蔵資料の意義－少年教護法制定期文書を中心に」大阪府立修

- 徳学院編『大阪府立修徳学院創立100周年記念誌』同院
- 福原勇（2009）「俵山が生んだ教育功労者熊野隆治小伝」『郷土文化ながと』長門郷土文化研究会、21号
- 二木謙吾（1969）「贅辞」前掲『観風苦難の生涯』所収
- 宮澤修（1987）『教護院の戦後を築いた人々』武蔵野学院図書資料室
- 吉田久一（1971）『昭和社会事業史』ミネルヴァ書房
- 吉田太郎（1967）「寺子屋における歴史教育の研究」『横浜国立大学教育紀要』6号

### 参考HP

公益財団法人松風会HP「松風会の沿革」<http://shohukai.or.jp/syouhu01/ayumi.htm>（2018年4月5日閲覧）

### 謝辞

本研究は科研費基盤研究（C）（課題番号16K04176）の研究成果の一部である。「観風文庫」調査においては、松風会事務局長の水津英三氏にご協力頂き、写真撮影及び本稿への掲載許可を得た。記して感謝申し上げます。